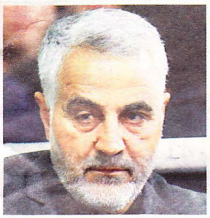
緊迫する世界

川上高司

▶▶4

トランプ大統領のクビに懸賞金 ソレイマニ氏殺害で長い非対称戦に

トランプ大統領



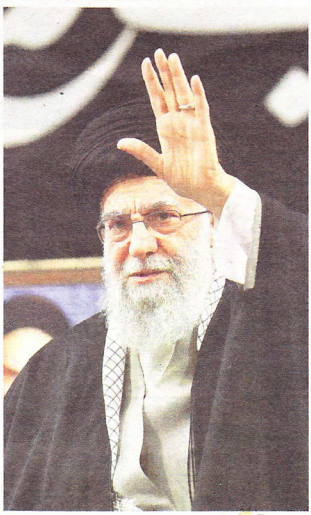
ソレイマニ氏

米民主党が、11月の大統領選に向けた候補指名争いの初戦、アイオワ州の党員集会で集計が遅れる大失態を演じた一方、共和党の指名が確実視されているドナルド・トランプ大統領は外交でも優勢を保っている。

中国の習近平国家主席が新型肺炎で苦境に陥ったのを見て、ほくそ笑んでいるのではないか。米軍によるイラン革命防衛隊の精鋭「コッズ部隊」のガーセム・ソレイマニ司令官の殺害は、北朝鮮の金正恩（キム・ジョンウン）朝鮮労働党委員長への警告にもなった。

ただ、ソレイマニ氏殺害の影響を軽視していいのかは、疑問だ。

確かに、ソレイマニ氏は、米国や有志連合の要員の死亡・負傷に関与したとされる「テロの首謀者」だが、イランの軍事指導者であり、同国の英雄であり、最高指導者のハメネイ師が最も信頼する人物だった。ソレイマニ氏の葬儀（1月7日）では、ハメネイ師が涙を流した。



イランの最高指導者、ハメネイ師は、どう判断するのか（最高指導者事務所撮影、アナトリア通信提供・ゲッティ＝共同）

AFP通信は1月21日、半国営イラン学生通信（ISNA）の報道として、イランの国会議員、アフマド・ハムゼ氏が同日、トランプ氏を殺害すれば300万ドル（約3億3000万円）の懸賞金を出すと発表したことを伝えた。

イスラムでは、あだ討ちは基本的に禁止されているが、ハメネイ師の報復宣言があれば合法となる。

ハメネイ師は現在、「喪」に服している。殺害はともかく、イランはこれから先、じっくりと時間をかけてトランプ氏や米国に復讐（ふくしゅう）をするに違いない。

デビッド・ペトレイアス元CIA長官は1月、米外交誌「フォーリン・ポリシー」で、ソレイマニ氏は「シーア派三日月地帯（イラン、イラク、シリア、レバノン南部）の中心人物だった」「彼の暗殺は、国際テロ組織『アルカーイダ』の最高指導者、ウサマ・ビンラーディンの殺害より深刻だ」と指摘した。

つまり、これまでのテロ集団との戦いとは違い、米国は今後、中東の大国・イランを相手に、長期の非対称戦を強いられることになりかねないのだ。むろん、イランの後ろには中国とロシアがついている。

米国との戦いは、前出の「コッズ部隊」が中心となって遂行するだろう。コッズ部隊は、レバノンのヒズボラ、パレスチナのハマス、イラクのシーア派民兵などのシーア派系武装組織を傘下に収める、最強の特殊情報部隊である。特に、米国との非対称戦では抜きんでている。

まず、イラクやそのほかの中東地域、同盟国にいる米軍関係者が標的になり、全米国人が標的となるのではないか。現実となれば、米国は前例のない長い、苦しい戦いに突入することになる。

トランプ氏は大統領選で再選されたとしても、「ソレイマニ氏の亡霊」におびえながら暮らすことになるかもしれない。

かわかみ・たかし　拓殖大学海外事情研究所所長。1955年、熊本県生まれ。大阪大学博士（国際公共政策）。フレッチャースクール外交政策研究所研究員、世界平和研究所研究員、防衛庁防衛研究所主任研究官、北陸大学法学部教授などを経て現職。著書・共著に『トランプ後の世界秩序』（東洋経済新報社）、『2020年生き残りの戦略―世界はこう動く！』（創成社）など。